

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：33927

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K04828

研究課題名（和文）フィレンツェの中世後期建築におけるゴシック様式と伝統様式の混淆に関する研究

研究課題名（英文）Study on the syncretism between Gothic style and the traditional style in the late medieval florentine architecture

研究代表者

石川 清（Ishikawa, Kiyoshi）

愛知産業大学・造形学部・名誉教授（移行）

研究者番号：40193271

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではフィレンツェにおける後期ゴシック建築を詳細に調査することで、フィレンツェにおけるゴシックの受容は、ゴシック様式と伝統様式との意図的混淆であることを明確にすることが論点である。中世フランス・モダニズムの建築言語とその構成法は、中世イタリア建築は必ずしも敬虔な歴史主義の中にあっただけではなく、あくまでも折衷的なアプローチによって、部分的にしかも合目的に受け入れられたと考えられる。中世イタリアでは為政者の統一的趣向によらずに、他の都市国家にはない建築が要求された。中世フランス・モダニズムの純粋主義と方法的には対極にあった。その状況をフィレンツェに絞って解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世・ルネサンス建築史研究に従事して以来、フィレンツェ大学やフィレンツェ市当局および同分野の海外研究者・聖職者と親交がある。ルネサンスを主たる研究領域としているが、中世末期のイタリアにおけるゴシック文化の受容システムの問題の解明なくして、ルネサンス文化・建築はより深淵な域に到達できないと考える。国家主義的偏向がかかる学際的学問領域にあって、日本人として問題解決に普遍性を与える意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The identity of Italian architecture was not its historicism but rather eclecticism. This eclectic approach was one of accommodation and diversity, of the tolerance of complexity and contradiction in architecture and the encouragement of purposeful originality in design, be it in structure. Gothic architecture appeared in the prosperous independent city-states of Italy in the 13th century. In fact, unlike in other regions of Europe, it did not replace Romanesque architecture. Italian architects preferred to keep the traditional designs established in the previous centuries, but they actively used the technical innovations of French Gothic. The Gothic style was first introduced into Florence in the end of mid-13th century. As seen in Santa Maria Novella in Florence, the deep spiritual mode was taken up most widely and intensely by the spiritual leaders of Italy, the mendicants, who were part of an international movement that was a major force in the late Gothic architecture in general.

研究分野：西洋建築史

キーワード：ゴシック 文化受容 イタリア フィレンツェ 中世建築 様式混淆

1. 研究開始当初の背景

中世後期にゴシックが蔓延していたイタリアをルネサンスが席卷したという学説は基本的には誤りであり、ゴシックはイタリアに十分には浸透していなかったと考えるべきである。Marvin Trachtenberg, *Gothic/Italian Gothic: Toward a redefinition, Journal of the Society of the Architectural Historians*, 49, 1991, pp.22-37は、ゴシック、つまり中世フランス・モダニズムが他のヨーロッパとは異なって、イタリアにおいては折衷主義的に導入されたとした。個々の建築が固有の目的によってゴシックを利用し、関連をもたない独立した文化として成立したとする。Trachtenbergの説は一定の説得力を持つが、ゴシックの受容の手法を単に"eclecticism"とするのは曖昧で漠然としている。折衷主義eclecticismとは一般には思想や見解など相異、矛盾する要素までも取り上げ、適当に取捨することによってまとめあげてをいう。例えば相異なる神学の折衷は混淆主義syncretismと呼ばれるべきであり、折衷や混淆はいずれも創造性の欠如や皮相性などを意味する侮蔑の含みをもつが、程度の差こそあれ思想や哲学的見解が伝統の取捨選択のうえに成立する総合的営為である限り、総合と折衷は現実には区別しがたい。ただし、自己の積極的基準に基づく批判的精神と新たな洞察を宿す場合には、折衷と混淆とは区別されるべきである。まさにそこが私の視点である。

個々のゴシック受容経緯に留まらず、社会政治的観点から把握することで、北ヨーロッパで起こったゴシック建築をイタリアがどのように受容したのか、その受容における複層的構造と諸相を明らかにし、学際的な隙間を少しでも埋めたいと考えたことが、2012-15年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「イタリアにおけるゴシック建築文化受容の複層性に関する研究」の私の着想であった。結果として托鉢修道会がイタリアに導入したゴシック様式も、フランス人権力者たちが導入したゴシック様式も時代を経るにつれ拒否され、忘れ去られていったが、意図して取り壊されることはなかった。つまり、フランス人が自らの覇権のために導入したゴシック様式は、当時のイタリア人にとって忌み嫌う対象ではあったが、托鉢修道会という媒体を通して導入されゴシック様式は、むしろ好ましいものとして受け止められたにちがいない。いずれにしてもイタリアにおける古典を基本とした折衷主義的な志向の中で受容されたと考えられる。それらを実証し、その複層構造を包括的に捉え、可視化することが最終目標である。

2. 研究の目的

イタリア・ゴシックを総括的にとらえようとしたTrachtenbergは、イタリアにおけるゴシック受容の特徴を折衷主義的受容と捉え、フィレンツェ独特のゴシック受容には踏み込んでいない。私はイタリアにおけるゴシック受容の特徴をむしろ意図的混淆と捉え、その様態をイタリアの一都市フィレンツェに絞り捉えていくことが本研究の目標である。フィレンツェの中世後期建築の特徴はゴシック様式とトスカナ地方固有の伝統様式との意図的混淆にあると捉え、それらをフィレンツェを中心に政治的文化的視点をも踏まえて総括的に捉えることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

イタリアにおけるゴシックの受容様態に関して、大別した主な6つのゴシック受容経路(位相)が想定できる。その位相は①カザマーリヤサン・ガルガーノ修道院のようなシトー会のグローバル化に伴う移入、②ドメニコ会、フランチェスコ会のような托鉢修道会の布教活動に伴う移入、③フランス人教皇・枢機卿の建設活動による移入、④アンジュー家のようなフランス人為政者による移入、⑤ミラノ大聖堂などにみられる外国人建設職人による直接導入、⑥フランス貴族趣味の影響下にあった国際ゴシックからの影響、などである。その中でフィレンツェにおけるゴシック受容に重要な影響を及ぼした2つの位相を中心に、相互の関連も考慮しながら再検討する。

(1)托鉢修道会によるゴシック様式のイタリア導入は、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院に最初にみられる。このドメニコ会聖堂に採用されているゴシック様式は簡素化されたもので、観想修道会シトー会のゴシック聖堂から影響を受けている。この聖堂にみられる「フィレンツェ風の支柱」は、後に大聖堂や公共建築の中にみることができ、それは修道会から都市へと普及していった事例を示している。特にドメニコ会の助修士の中には建築家の役割を担う者がおり、修道院死者名簿にはフランス・ガスコニュ出身の助修士が数多く記載され、彼らがフィレンツェに初めての大規模リブ・ヴォールト架構技術、その他ゴシック要素をもたらした可能性が高い。やがて、フランチェスコ会サンタ・クロチェ聖堂にも受容され、司教座聖堂であるフィレンツェ大聖堂にもヴォールト架構技術とともに移入される。しかし、12世紀半頃からの観想修道会シトー会によって培われてきた住宅政策や財政管理などのフィレンツェ政府への献身的で積極的な協力からの信頼関係が根底にあることは、多くのフィレンツェの聖堂がベルナルド式平面形を基礎としていることからわかる。

(2)もう一つのフィレンツェにおけるゴシック受容の重要な位相は、為政者シャルル・ダンジューに関連している。シャルル・ダンジューは、シチリア王国征服後にレアルヴァッレとヴィットリアの2つのシトー会修道院に政治的理由でゴシック様式を意図的に採用し、「シチリアの晩鐘」後の支配の手立てとした。また彼はローマにおいても教皇の活動と深く関わっただけでなく、ナポリでのパトロネージにおいてもフランス人為政者としてフランス風*al modo francesco*を強調して意図的にゴシックを導入したことは明白である。フィレンツェに限らずイタリア都市国家は、政治情勢・政治力学に微妙に呼応しながら存続している。シャルルが皇帝権をもつシュタウフェン家を打倒してイタリアの覇者となったということは、1265年以降の政治的現実即して定義し直すと、教皇を支持する「ゲルフィ」はシャルルの同盟者となったということ

である。都市国家は強大な中央集権のもとに存在していない弱点を補完しようとした。この視点は重要である。フィレンツェのゴシック受容は、フランス風を強調するフランス人為政者のコードとして、あるいは托鉢修道会、フィレンツェのドメニコ修道会サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂などの深遠な精神的モードとして、そしてあるいはまた表面的な世俗的コードとして、司教座聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂や、オルサンミケーレ、その他公共ロジアにゴシックを受容した。

ヴィテルボの教皇宮殿のような、ある意味での世俗建築は最上の風趣でゴシックを模倣したが、逆に後期ゴシックの時期に国際的な運動を繰り広げた托鉢修道会の、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の深遠な精神的主導者は、当初はフィレンツェ大聖堂のような記念碑的建造物と拮抗関係にあったにもかかわらず、さらに広く効果的にしかも意図的混淆主義によってフランス・ゴシックを受容(利用)したのである。イタリアにおけるその後のルネサンスへのシフトは、通説であるゴシックの拒絶というよりも、むしろ長く続いた中世イタリアの貪欲な折衷主義に対抗する純粋な歴史主義(古典主義)への回帰と捉えるべきであると考えられる。

4. 研究成果

(1)ドメニコ修道会のフィレンツェ進出

ドメニコ会のフィレンツェの聖堂参事会はドメニコ会の最も古い修道院の一つである。ジョヴァンニ・ディ・サレルノ率いる12人の修道士がボローニャからフィレンツェに到着したのは1219年6月のことであった。教皇ホノリウス3世から会則の承認を得てから3年足らずの出来事であった。フィレンツェの修道院は、1221年にボローニャで開催された第2回総会にて、ドメニコ会のローマ管区内に彼らの存在が承認された。フィレンツェ聖堂参事会の発展は急激で、ローマ管区内だけでなく、修道会全体で最も大規模で重要なものとなった。

フィレンツェに到着してわずか2年後に、聖堂参事会の仮の施設は2度の移転を経て、1221年11月8日、フィレンツェ大聖堂のカノンが数世紀の間所有していた建物と土地に関連して、ロマネスク聖堂を与えられた。11世紀から13世紀に3つの聖堂が建設され、それぞれの後続建物が前身建物を内包している。3つの聖堂のうちの最初のもは、1094年に奉献された教区教会である。それは、東に主入口をもち、西に後陣をもつ東西軸上にある長堂式建物であった。聖堂の東入口の前には四角いアトリウムをもち、3廊式で後陣が西にあった。この聖堂の立面は知られていない。第2聖堂はサンタ・マリア・ノヴェッラにドメニコ会が移り住んだ後に建設されたもので、1246年に建設開始された。東に主入口をもつ東西軸の長堂式聖堂で、ホールを東に拡張して長方形の礼拝堂をもつ。その南壁は1094年に建設された北壁を内包している。初めの第1聖堂は、大きな脇入口によって思い起こさせる主入口を持ち、翼廊部分に当たる。一方、第2聖堂は、翼廊の北側に並行に位置する(第3聖堂のベルナル型)の連続した後陣礼拝堂部分に当たる)。ロマネスクとゴシックの聖堂は、現在の聖堂建築のロマネスクとゴシックの部分に呼応する。ドメニコ会士たちは、ロマネスクとゴシックの柱頭の対比は、異教的古い形式とそうではない新しい形式との単なる対比ではなく、借用したロマネスクの聖堂から、ゴシックのそれに成長・発展する時の流れを表現することをすでに構想していたようだ。

1279年にはドメニコ会聖堂の新たな建設計画が開始され、その結果、建物は初期の聖堂両方を内包することになった。新しい建設に伴って聖堂の向きは完全に変わり、身廊は南北軸をなし、主入口は南に、後陣は北に位置し、平面は袖廊をもつ3廊式のバシリカで、四角い後陣とその両脇に礼拝堂をもつ形式となる。サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院内の最初期建設のキオストリーノ・デイ・モルティは、成立年代に関しては諸説あるものの、H. Klotz, *Die Frühwerke Brunelleschis und die Mittelalterliche Tradition*, Berlin, 1970は1280年建設とし、「フィレンツェで最初のゴシックの八角柱の事例」であるとしている。

(2)サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の身廊建設

この建物の注目すべき特徴は、身廊の最初に完成された後陣に近い部分は完全なゴシック様式であるのに、1300年以降に建設された、ファサードに近い3つのベイは、いくつかのピアで、ゴシックの様式とは異なる、平滑で葉脈が彫り込まれていないアカンサスの葉をもつコリント式柱頭が用いられている。この特異な状況を記述するJohn Onians, *Bears of Meaning: The Classical Orders in Antiquity, the Middle Ages, and the Renaissance*, Princeton University Press, 1988が出版される前に著された論考 John Onians, S. Maria Novella and the Meaning of Gothic, in *Scritti di Storia dell'Arte in onore di Roberto Salvini*, Firenze, 1984, pp.143-147の中ではより詳しく論じられてはいる。Oniansはサンタ・マリア・ノヴェッラの第1聖堂のみならずフィレンツェのサン・ジョヴァンニ洗礼堂を含むトスカーナ地方のロマネスク建築を想起させるものとして「ゴシックからロマネスクに立ち戻った」と考えている。しかし、実際にはそのような考えに至るような効果的な柱頭配置にはなっていない。身廊上部のヴォールト架構を支える、高い位置にある身廊内側の柱頭は、ブルピト、説教壇がある側は6つすべてゴシック式で、身廊の反対側は後陣側3つがゴシック式で、ファサードに近い部分3つは葉脈が彫り込まれていない平滑なアカンサスの葉を持つ、シンプルなコリント式柱頭なのである。しかもそれ以外の身廊と側廊の間のアーチを支える柱頭、側廊を横断するアーチを支える柱頭の、ゴシック式、リッチなコリント式、簡素なコリント式の不規則な配置を全く説明し切れていない。私論を述べると、14、15世紀にはフィレンツェの托鉢修道会にはミサの際に聖俗の人びとと聖職者を分離する仕切りが存在した。英語ではRood Screen、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂ではponte、サンタ・クローチェ聖堂ではtramezzoと呼ばれる聖堂側廊の壁から壁まで横断し、一般的には少なくとも1スパンの奥行きがある自立した仕切りである。サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂では2階を備えていたために、ponte(橋)という言い方をしていたのであろう。Screenという言葉から「幕」という訳語を付けるのは誤りである。建築構造物である。サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂のponteはファサードから第4ベイの後部と第5ベイの中間部ぐらまでの位置にあり、ponteの2階からは身廊の支柱が突き出していた。2階部ではミサの際にはコーラス隊が待機していた。ponteの下にはキオストロ側に入りする聖

職者用の扉があり、反対側の側廊の第3ベイには世俗の人びとの入口があった。レオン・バッティスタ・アルベルティ設計による聖堂ファサードが完成するまでは、フィレンツェ市民はその入口から出入りをしていと言われていた。世俗の人びとは自らの家族礼拝堂における礼拝以外には通常ponteの奥には入ることができなかった(なお、スクリーンは16世紀にヴァザーリによってサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂修復改造の際にとり除かれた)。したがって、フィレンツェ市民は少なくともファサードが完成するまでは側廊の第3ベイにある入口扉から聖堂に入り、第2ベイと第3ベイの間の支柱に付設された説教壇の前で説教を聴き、スクリーン越しにミサに参加した。第3ベイが他のベイより広く、身廊の幅とほぼ同じ正方形に近いのは、市民にとってそこが説教壇前の特別な空間であったことを暗示している。重要なフィレンツェ市民が集う空間であった。柱頭が偏在している理由を考えた時、第1ベイから第4ベイの間の身廊支柱上部の横断アーチ柱頭がファサードに近い部分3つが葉脈が彫り込まれていないシンプルなコリント式柱頭なのは、説教を聴く人びとの背中側、後方上部であるから目立たないからであり、逆に入口近くの目線近くにある第2ベイと第3ベイ間の支柱の柱頭には3方向にゴシック式を集中させて目立たせている。「突貫工事の中での合理精神」、フランクルの言う托鉢修道会の「引き算」が働いている。Oniansの屁理屈より私説の方がはるかに合理的で説得力を持つと考える。

第3ベイの入口の両脇の聖堂壁面にある一対のコンポジット式柱頭は常に洗礼堂の同様の位置にある、フィレンツェ市民に馴染みのあるコンポジット式柱頭を想起させる。最初の3ベイの一般的なロマネスクの特徴は、トスカーナ・ロマネスク建築の意図的な温存を示していると考えられる風潮は、否定すべき問題ではないが、世俗の入口からよく見える位置にゴシック式柱頭が集中的に置かれていることに説明が付かないのである。とりあえず意図的な混沌様式と考えれば問題はない。イタリアにおけるゴシック受容の問題は、柱頭だけに留まらない。ヴォールト架構技術の受容がさらに重要な課題であった。

(3) サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院聖堂の構造システム

イタリアでは、イタリア人がゴシックの時代に大規模なヴォールト架構を受容したにもかかわらず、フランス・ゴシック建築の美学とその構造システムを一意専心に受け入れたわけではない。そのような建物の中で、イタリア人工石工頭に用いられた構造的アプローチは、フランス・システムと必ずしも互換性のあるものではなかった。Trachtenbergは、「イタリアは真のゴシックではなく、バリ建築帝国の植民地には決してならず、個々の建築がそれぞれの目的でゴシックを利用したのだ」と主張した。その他の研究者は、フランス・ゴシックの思想を理解し、採用するに十分な構造技術や建築をイタリア人たちが十分に修得していなかったと主張した。これらの議論は、パリ人ミニョMignotがミラノ大聖堂建設の際に不正確なバットレスやその他基準外の状況を批判し、イタリア人が自らの構造システムが必要であるという返答したことなどを記したMilanese Expertiseのような記録を通して中世に遡ることができる。ミラノのイタリア人がつくった構造技術の不正確さに対する主張は、彼らが建設した大規模な大聖堂が600年もの時を経て存在していることから妥当性を欠いていると言わなければならない。

E. B. Smith, 'Ars Mechanica': Gothic Structure in Italy, *The Engineering of Medieval Cathedral*, ed. by Lynn Courtenay, Ashgate, 1997, pp.219-233が主張するように、イタリアでは、初めて大規模なヴォールト架構が採用されながら、美的にも構造的にもフランス・ゴシック・システムがそのまま受容されているわけではない。フランス・ゴシックとフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の構造システムの相違を検討した、Ece Erdogmus, *Structural Appraisal of the Florentine Gothic Construction System*, Ph.D.diss., Pennsylvania State Univ., 2004は、ゴシック・ヴォールト架構から派生した、フィレンツェの横断アーチをもつ3径間連続のドーム型ヴォールト・システムの方が構造的に有利であることを構造解析により実証している。その構造技術がフィレンツェの他の聖堂建築や中央イタリアの聖堂に普及していったと考えられる。ここにおいてもフランクルが指摘する引き算が働いている。禁欲主義を托鉢修道会的に表現した言葉であるが、托鉢修道会はゴシック受容に選択的であった。

(4) サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院の助修士の活躍

この修道院の人口統計学的側面は、修道院によって丹念に記録された『死者名簿』*Necrologio di Santa Maria Novella*によって知ることができる。1300年から1370年の間にサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院の助修士の数は70人以上に達した。その中で修道院全体の4分の1ほどが助修士であった。助修士は、説教者や学者として、修道会のかなり重要な地位に就き、司教や大司教、重要な外交使節としての任務を遂行する者も多く、助修士も様々な重要な活動を担った。特に傑出した助修士の中には、石工・大工職人としての役割を担う建設に精通した何人かの助修士も含まれていた。1225年以降年代順に記述されている死者名簿に登場するフラ・リストロFra Ristorus de Campi(1283年没)は、フラ・シストFra Xistus(1289年没)とともにarchitectorと記された最初の助修士conversoである。しかし、この死亡記録Obitusは16世紀の付け足しであると思われる。ベヴスナーは、早計にもこれを中世におけるarchitectorという用語の稀な使用例として取り上げているが、必ずしも13世紀の用語使用としてみることはできない。フラ・ジョヴァンニ・カンピは、修道院建物の建設に多く関連した助修士で、さらに公共事業にも参加し、1337年にはポンテ・デッラ・カッライアを倒壊した木造から石造橋に置き換える工事を實現しているし、もう一人の著名な助修士フラ・ヤコポ・タレンティFra Jacopo Talentiは、助修士フラ・ヤコポ・パッサヴァンティFra Jacopo Passavantiとともに修道院に分散する建物をかなりモニュメンタルな統合した建物に変え、修道院の建設第2段階の實現に関与していた。パッサヴァンティは、フィレンツェの名家の出身で、1340-41年に説教者になり、1348-1352年にはフィレンツェ司教代理、1355年には修道院長に選出されている。彼の聖堂と修道院の建設と装飾への介入は重要であり、5人の建設委員の主要メンバーであった。彼はフィレンツェ郊外のチェルトーザ建設においてもその建設監督として管理能力を發揮して、その実務は助修士フラ・ヤコポ・タレンティ指揮下の石工たちによってなされた。また、ヤコポ・タレンティとともに大聖堂建設局のメンバーとして派遣された修道院助修士の中にフラ・ザノービ・デ・グアスコニFra

Zanobi de' Guasconiがいる。フィレンツェの名門グアスコニ家とは異なる、フランスのガスコーニュ地方出身の修道士が他にも散見される。彼らがフランスの大規模ヴォールト架構技術をフィレンツェに持ち込んだ可能性があるとは私は推察している。おそらくは協同作業の中での彼らの監督業務は、施工技術だけでなく、芸術的な決定に及んだ可能性が高い。

Vincenzo Borghigiani, *Cronica Minuta*, I, Archivio di Santa Maria Novella, I.A.26, 1757-60, pp.40-41の後年書き写した建設記録によれば、1301年には新聖堂身廊の最初2ベイ建設のために旧聖堂の東側半分が取り壊され、1302年には東側側廊第3ベイに入口扉が開かれ、1305年には聖堂全体が大まかには整った(*nozzamente imbastito*)。1325年にファサードの壁体の建設が開始され、建物全体は1355年までは完成しないとする。この記録は主要な工事過程を書き写していると思われるが、ヴォールト架構については特記されていないうえ、完成までの30年間の記録が欠如している。その期間に大掛かりな設計変更が必要とされたのではないかと推測する。建設工事の進行がベイごとではなく、周囲の側廊壁体から始まっていることから、その時期に中世初期にごく一般的であった木造屋根構造からフィレンツェに今までなかったドーム型ヴォールト架構への構造変更がなされたこともあり得るのではないかと考える。少なくとも助修士ヤコポ・タレンティは1316年から現場にいた。

(5) 司教座聖堂フィレンツェ大聖堂の身廊建設

14世紀半頃にはフィレンツェ大聖堂の身廊部の建設が進み、フィレンツェにおいて身廊にヴォールト架構を初めて実現したサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の重要部分の建設実務に関与した助修士フラ・ヤコポ・タレンティらが、大聖堂建設局の決議録にフランチェスコ修道会その他の修道院の修道士らと共に '*consiglio*' として頻りに名を連ね、大ヴォールト架構建設の専門的経験的知識を提供していることは極めて重要である。サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂において、フィレンツェで初めて聖堂身廊にヴォールト架構を実現したヤコポ・タレンティが、その専門的経験を活かして、規模を拡張したフィレンツェ大聖堂身廊建設においてその指導的立場にあっても不思議なことではない。また、フィレンツェ大聖堂の世俗の建設職人フランチェスコ・タレンティがヤコポの助力でフィレンツェ大聖堂の大支柱の設計競技の勝者となったことが記された、現在はフィレンツェ古文書館に保管されている3枚の羊皮紙がサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院から発見されたことも、ヤコポとフランチェスコが兄弟であった可能性をさらに高めている。

(6) 歴史主義の根強いモデルとしてのサン・ジョヴァンニ洗礼堂

フィレンツェのサン・ジョヴァンニ洗礼堂はおそらく11世紀の第3四半世紀に建設開始され、その建設は地元司教の努力によって推し進められただけでなく、ヘンリー2世による寄進を受けたことは注目に値する。建設はその世紀を通して進み、8面の外観と室内ファサードが同時代に完成した。ピラミッド状の大理石屋根頂部に載る頂塔は、1150年頃に設置された。八角形平面は、ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノの教皇建物の中にある5世紀の洗礼堂のような最も権威ある建物と関連づけられている。洗礼堂とラヴェンナにあるサン・ヴィターレの八角形聖堂との密接な関係も発見することができる。ラヴェンナが総督府として、また西方に帝国の権力を示す最後の砦であった時、サン・ヴィターレ聖堂がユスティニアヌス帝治世下(527-565)で帝国の権威を示す重要な立場にあった。洗礼堂の *opus sectile* 模様は、サン・ヴィターレ聖堂アプシスの玉座の壁から直接引用されたものである。

この洗礼堂が11世紀のかんがりの主張が込められた建築であったことは言うまでもない。この時代に直接比較し得る建築は存在しないが、ロマネスクの建築モニュメント全体が古代の参照によって特徴づけられていることの証である。しかし、教皇と皇帝間の権力抗争が11世紀に演じられたトスカーナ地方において、ヨーロッパの他のどの地域よりも古代ローマ化の傾向が強かった。フィレンツェの装飾的ポリクロミーと呼ばれる大理石被覆へのアプローチは、11世紀トスカーナ地方の皇帝権力の中心であったピサのローマ帝国の権力を喧伝する被覆プロセスとは明確に異なることを、サン・ジョヴァンニ洗礼堂を初めとするフィレンツェ独特のロマネスク様式が示している。洗礼堂はフィレンツェ政府の権力と関連したその後の建築モデルとして機能したのである。

(7) むすび

20世紀半頃のフィレンツェ大聖堂身廊床部の発掘調査によってロマネスク様式の柱頭と八角柱が発見された。それは15世紀半頃にミケロツォ・ディ・バルトロメオ(1396-1472)によって建設された大聖堂頂塔に用いられた半円柱の柱頭と酷似している。おそらく破棄されたサンタ・レパラータ聖堂の古典変種(ロマネスク)を直接採用したもので、その古代モチーフは古代以後の変種から模倣され、古代のオリジナルの観察と知識とその模倣に向かわせたのであろう。ロマネスクだけでなく、13世紀末から14世紀建築もまた、15世紀にも支配的であった残存と再生(サヴァイヴァルとリヴァイヴァル)を持続している。14世紀後半の建築施工者あるいは建築家は、フランス優位の時代を敏感に感じ取って、その時代のフランス風 *al modo francesco* を彼らのやり方で意図的に導入し混淆したのであろう。

オルサンミケーレ聖堂のオルカーニャによるタベルナーコロは、表面的には複雑であるにもかかわらず、デザインは根本的には古典的である。半円アーチ、円柱・柱頭・柱脚、エンタブラチュア、柱礎のプロポーションは古典的であり、ディテールはゴシック的な湾曲を与えられているにもかかわらず、様式的には明らかに古代風 *all'antica* である。そして、ジョットの作品からポルタ・デッラ・マンデルラ、ギベルティの北門扉の建築背景、サンタ・トリニタ聖堂聖具室の門扉へと至る作品は、一見「ゴシック的」でありながら、*all'antica* の伝統が持続的に貫かれている。「受動的受容」ではなく、「選択的受容」によって、「折衷」ではなく「混淆」が意図的に実行されているのである。

最後に、フィレンツェ独特の八角柱や *capitello a foglie d'acqua* などの *retardataire* の問題等に対する実地調査がCovid19蔓延によって阻止され、特定の建築部位に関しては結論に至っていないことが悔やまれてならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------